碧の風

千葉市立川戸中学校
校報　第８号
令和５年１２月２０日

一年を振り返って

校長　　板垣　章子

１２月に入りテレビやネットでは年末を感じさせる話題が連日のように報道されています。「今年の流行語（アレ)」、「今年の漢字（税)」、「今年の一皿（ご馳走おにぎり)」‥‥。あらゆる分野において、「一年」という単位は総まとめをするのに丁度いい年月なのでしょう。

さて川戸中学校にとって、今年の一番は何だったのでしょう。個人的には、コロナが２類から５類に移行したことが大きかったように思えます。これまでは何をやるにも「中止」「縮小」の方向で進めなければならなかったことが、「拡大」「再開」などという方向に大きく舵を切ることができるようになりました。小中一貫教育による相互の交流や、学校行事への保護者の参観など、様々な面で緩和が進みました。１年生の校外学習を従来の上野・浅草方面のグループ活動に戻すことができたことも、象徴的なことといえます。地域の行事も次々と復活し、川戸らしさを実感した一年でした。もちろんコロナが終息したわけではなく、むしろ影を潜めていたインフルエンザが猛威を振るう今冬は一層の警戒が必要ですが、それでも明るい未来への一歩が踏み出せた年であったように思えます。

冬休みまで残りわずかとなりましたが、生徒は手を抜くことなく頑張っています。息を弾ませながら登校し、朝の会を運営します。授業では教科書を読み、先生の話に耳を傾け、ギガタブを用いて調べたり書き込んだり。英語の世界に浸り、図形の証明に没頭し、道徳では意見を交換し合っています。黙々と清掃し、放課後の時間まで委員会の仕事や部活動に精を出し、日没に追われるように下校していきます。決して楽しいことばかりではないかもしれませんが、一年間の地道な積み重ねの中で、生徒たちは人として確実に成長しています。

「新たな決意」、「生命の尊重」、「友好の精神」。

これらは生徒たちに冬休みの宿題として課された書初めの言葉です。どの言葉も、一年を振り返るこの時期には、心に染み入るものがあります。冬休みに生徒たちは、習字道具を座敷に広げ、一文字一文字心を込めて書くことでしょう。周りで見ている親御さんは、壁や床を汚さないか、ハラハラしているかもしれません。川戸の子供たちは、デジタル時代には珍しいほど、とても丁寧でステキな書初めを仕上げてきます。子供たちを見守る温かい大人の愛情と、伝統文化を重んじる川戸の風土を感じます。

今年も学校へのご理解とご協力をいただき、ありがとうございました。

良いお年をお迎えください。